

統合研究の研究組織—地球研・流域プロジェクトの経験から

梅津千恵子（総合地球環境学研究所）

谷口真人（総合地球環境学研究所）

渡邊紹裕（総合地球環境学研究所）

谷内茂雄（総合地球環境学研究所）

地球環境問題を解決するための異なる分野からの統合知 (consilience) の重要性は研究や行政に携わる者によって長い間議論されてきた。実社会での問題の本質が複雑になればなるほど、環境問題の分析・解決のための統合的アプローチに対する社会的要請が高まる。流域は生態系の地理的境界であり、社会および経済的活動を地域スケールで支える基盤である。流域の環境問題には多面的要素が含まれる。統合的プロジェクト研究は学際的研究への新しい活動の場を提供するものである。研究の概念、方法、地理的対象地域等によって統合することが可能である。

統合的プロジェクト研究の研究組織を比較する試みを行った。対象としたプロジェクトは「乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響」、「琵琶湖—淀川水系における流域管理モデルの構築」、「都市の地下環境に残る人間活動の影響」の地球研3流域プロジェクトである。これらのプロジェクトでは、それぞれのプロジェクトのミッションおよび統合的目標を遂行するための研究組織が形成されてきた。統合には、空間、時間的変化の比較、指標の作成、結合モデルの開発、研究者間のコミュニケーション等さまざまなツールが用いられた。流域管理のためには、科学的知識を結合する他、流域の科学的知見を伝えるためにステークホルダーとの学際的コミュニケーションが非常に重要である。